【第14号】

自分らしく生きる

第７回

人はどのように人生の最終章を生きるのか。ご本人・介護者のお話をお伝えしています。今回は在宅でご家族を看取られた介護者から当時の様子のお話を伺いました。

たすけあいワーカーズとケアマネジャーの連携で支えた
姉妹の介護生活22年間

母　浦野龍子さん・令和2年4月　91歳で逝去
・・・当時介護度4（北区）

母を看取り穏やかなお二人

●仕事を辞めず介護と育児の生活

23年前、浦野さんは69才の時にくも膜下出血で倒れ、右半身の麻痺・失語症などの重い後遺症が残った。それでも「家に連れて帰ります！」と病院に宣言し、在宅介護の生活が始まった。

介護者は同居していた次女の久美子さんと仕事のため通いで来ていた長女の郁子さん。当初はまだ子どもも小さく育児の真っ盛り。「子育ても仕事も介護も全て1／3ずつでした。」と郁子さんが当時の様子を語る。

●本人の頑張り、家族の支え、サービス事業所との連携

重い後遺症がありながらさほど悪化せずに維持できたのは、「家で暮らせるように頑張って！」と仕事の合間に長女さんによる厳しい1日2時間のリハビリと本人の頑張りや周囲の方の励まし、そしてサービスを上手く使いこなせたことが大きいのでは。

倒れる前の浦野さんは、長女が2才の時にご主人を亡くし、仕事と父親の役も果たすなかなか厳しい人だったらしいが、病後は一転して笑顔の浦野さんに変わった。

デイサービスで誕生日のお祝い

「失語症になっても笑顔とありがとうの言葉を忘れなかったことは幸せでした」と長女さん。お二人とも二言目には「＊ひよこさんとケアマネさんがいてくれたから！」と口を揃える。「本当にみんなが総力をあげてお世話してくれました。」とのこと。

＊ＡＣＴ北区たすけあいワーカーズ ひよこ
介護保険開始前から地域のたすけあい事業を実施

●介護に悔いなし

3月末に心不全のため入院したが、コロナ禍のため面会できなかった。退院して介護を再開するつもりでいたが別れは突然だった。

「あれよあれよと言う間に終わってしまいました。」「穏やかな22年間で母は幸せだったかも。」

締めくくる最後の言葉に、介護へのやり切った思いが感じられた。